ら、妾は家を出る前に話したです——さもないなら、妾は決して話しません。

ウキンダーミャ。(怒って)では、早速私達の家を出て行つて頂きませう。マーガレットには、貴女の辯解を、私がいたします。

(ウキンダーミャ夫人Rより登場。夫人は寫眞を手にしてイレーネ夫人の方へ行く。ウキンダーミャはソファの後へ行つて、舞臺の進行する如くイレーネ夫人を瞶める)。

ウキンダーミャ夫人。イレーネさん、御待せいたしましてどうも濟みませんでした、寫眞が何處にも發見らなかつたのですが。遂々夫の着衣室で發見けたのですよ——彼の人はそれを盜んでゐたの。

イレーネ夫人。(彼の女の手より寫眞をとつて瞶める)驚きやしないわ——面白い。(ウキンダーミャ夫人と一所にソファへ行つて、夫人の後に座る。再び寫眞を見る)そう、そう貴女の坊つちやんね！　何んていふ名なの？

ウキンダーミャ夫人。ゼラードよ、妾の御父さんの名を繼いだの。

イレーネ夫人。(寫眞を置いて)眞實に？

ウキンダーミャ夫人。そうよ、若し女でしらね、御母さんの名は繼かせるのだつたのですよ。妾の御母さんの名はね、妾の名と同じくマーガレットだつたのですよ。

イレーネ夫人。妾の名も矢張りマーガレットよ。

ウキンダーミャ夫人。眞實！

イレーネ夫人。そうなのよ、（間）貴女は、大變お母さんには思ひ出が深いので
すわね、奥さん、貴女の旦那がそう申しましたよ。
ウキンダーミャ夫人。妾達はすべて人生には理想を抱いてゐますの、少くとも妾
達は抱かなければないないのです。妾の理想はお母さんなのです。
イレーネ夫人。理想は危險な事で、現實は一層善い事です。前者には害がある
が、後者は一層善いのです。
ウキンダーミャ夫人。（頭を振り乍ら）妾の理想を失ふものなら、何ものも失つて
了へます。
イレーネ夫人。何ものも？
ウキンダーミャ夫人。そうですの。（間）

イレーネ夫人。貴女のお父さんはね、お母さんの事を度々御話になりまして？
ウキンダーミャ夫人。いゝえ、それがね、お父さんには何よりも辛がつたので
すよ。御父さんの話によりますと、何故かお母さんは妾が生れると二三月經
つて亡くなつたのですつて。お父さんは、その話をする時には、もう眼に涙
が一拂になつたのですの。それでお母さんの名は、二度と再び決して言はない
で呉れと申しましたの、それを聞きのはお父さんには隨分辛らがつたのです
よ。妾のお父さんは——妾の御父さんは全く失戀して死んだのですの。お父
さんの生涯といふものは全く破滅の生涯だつたのですよ。
イレーネ夫人。（立ち上り）失禮いたします。奥さんもう妾は行かなければならな
いのですから。

ウキンダーミャ夫人。（立ち上り）いゝえ、まあ、尙宜しいじやありませんか。

イレーネ夫人。さう出來ますなら好いのですが。妾の馬車はもう時間に間に合ふやうに歸つて來なければならないのですから、妾の手紙を持つてジデブルグ夫人の許へ遣つたのですが。

ウキンダーミャ夫人。貴方、イレーネさんの馬車が歸つてゐるかどうか見て御やりなさいませんか？

イレーネ夫人。まあ、何卒御關いなく、ウキンダーミャさん。

ウキンダーミャ夫人。さあ、あなたどうぞ行つて見て下さいな。

（ウキンダーミャは些しの間躊躇してゐたが、やがてイレーネ夫人を瞶める、夫人は依然として平氣なので、彼は室を出で

行く）

（イレーネ夫人に）まあ、何と早し上げたら好いでせうか？　昨夜妾を助けて下さいましてね、（夫人の方へ行く）

イレーネ夫人。しッ——話しちやいけません。

ウキンダーミャ夫人。妾は話さなければなりません。妾がどんなに貴女の御恩に感謝してゐますか、貴女には御判りになりますまい。そのまゝでは濟みません。勿体ない事です。妾は、夫にすつかり話そうと思つてゐます、それが妾の義務です。

イレーネ夫人。それが貴女の義務ではありません——少くとも、貴女は夫の外、他の人に盡す義務を持つてゐます。何か、妾の恩になつてはゐませ

んか？

ウキンダーミャ夫人。貴女には何もかも御恩になつてゐますよ。

イレーネ夫人。そこで、貴女は秘密で妾に、貴女の義務を盡して下さい。それが、盡すに就いての唯一の方法です。あの事は、誰にも話して了つて妾の生涯中での唯一の善事を汚がさないで下さい。昨夜起つた事は、妾達二人の間の秘密にして置くやうに約束して下さい。貴女は貴女の夫の生活に、苦痛を與へてはなりません、何故、彼の方の愛を汚がしますか？　貴女はそれを汚がしてはなりません。愛は容易く滅びます。まあ！　ほんに容易く滅びます貴女は決して夫に話さないといふ事を、確く貴女の言葉に誓つて下さい。奥さん、妾は飽くまでも申します。

ウキンダーミャ夫人。（首を傾れ）それは貴女の希望で、妾のではありません。

イレーネ夫人。そうよ、それは妾の希望です。そして貴女は決して御忘すれになつてはなりませんよ——妾は貴女の母親のやうな心持で、貴女を考へ度いのですから。それから貴女にもね、その心持になつて貰い度いの。

ウキンダーミャ夫人。（曖め乍ら）　え、始終其の心持でゐたいわ。妾はね是れまでの中でたつた一度妾のお母さんを忘れましたの——それが昨夜の事なの。まあ、お母さんの事を思ひ出したなら、眞逆、あんな馬鹿げた、惡い事はしませんでしたよ。

イレーネ夫人。（輕く身震ひし）　しッ、昨夜はもう過ぎて終へました。

（ウキンダーミャ登場）

ウキンダーミヤ。貴女の馬車は尙だ歸つて來ません、イレーネさん。

イレーネ夫人。構いませんよ。妾は乘合馬車に乘ります。此の世の中に、善良なるシユロースバリーや、タルボットのやうに尊敬の出來る者はありませんそれから奥さん、恐れ入りますが、妾はもう、御暇をしなければなりませんの、（Cを立ち）まあ、思ひ出されますね。貴女は妾は變に思ふでせうか、然し此の扇には大變な思ひ出が得られましたよ、昨夜貴女の舞踏會の時、本統に阿呆らしい間違で持つて行つた此の扇さ、で、これを妾に下さらない？　ウキンダーミヤさんは、貴女が下さるでせうと申しましたよ、これは彼の方の贈物（プレセント）ですわね。

ウキンダーミヤ夫人。さあ、何卒、御望みなら。ですが、妾の名前が書いてあ

つてよ、マーガレットと書いてありますよ。

イレーネ夫人。ですが、妾も同じクリスチャンネームを持つてゐますよ。

ウキンダーミヤ夫人。まあ、忘れて了つた。ではもう文句なしに、何んて妙な事でせうね！　妾達の名が同じだなんて。

イレーネ女人。實際、妙ですわね。有難う——此れがもう貴女の一生の思ひ出になりますわ。（二人は握手する）

（バーカー登場）

バーカー。アウガスタス卿と、イレーネ夫人の馬車が參りました。

（アウガスタス卿登場）

アウガスタス。いや、今日は。今日は、奥さん。（イレーネ夫人を見る）イレーネさ

ん！

イレーネ夫人。如何で御坐いますか？　アウガスタスさん、今日は何も御變りも御座いませんか？

アウガスタス。（冷かに）イレーネさん、有難う、何も變りはありません。

イレーネ夫人。貴方の御顏の色は良くありませんよ、アウガスタスさん。余り遲くまでゐまして――それが貴方に惡いのですよ。眞實に、御自分でもつと御注意なさいよ。左樣なら、ウキンダーミヤさん、（アウガスタスに首を下げて、扉の方へ行く、直ぐに後を振り返つて笑ふ）　アウガスタスさん！　妾を馬車まで見送りしなくつて？　貴方に扇を遺るかも知れないわ。

ウキンダーミヤ。御免なさい！

イレーネ夫人。いや、アウガスタスさんの事よ、妾は、公爵夫人に特別な用件があるのですよ、貴方は扇を持つて行つて呉れない？　アウガスタスさん。

アウガスタス。眞實に御望みなら、イレーネさん。

イレーネ夫人。（笑ひ乍ら）勿論ですわ、喜んで持つてゐて頂戴。貴方なら何んでも喜んで持つて行つて了ふわ、アウガスタスさん。

（扉に行くと、振り返つて些しの間、ウキンダーミヤ夫人を瞶めると、二人の眼と眼は、思はず逢つたが、夫人は見返つてアウガスタスを供へて扉Cより退場）。

ウキンダーミヤ夫人。貴女は、二度と決してイレーネ夫人の惡口を話しちやいけませんよ。アーサー、話す？

ウキンダーミャ。（嚴肅に）世間で考へるより善い女だ。

ウキンダーミャ夫人。妾よりも善い女ですよ。

ウキンダーミャ。（夫人の毛髮を打つやうにして笑ふ）お前、お前と彼の女とは別世界の人間だ。お前の世界は、惡魔が決して入らない世界だ。

ウキンダーミャ夫人。そんな事を仰つしやいましな、貴方。妾達のあらゆる人間には同じ世界があります。それから善と、惡と、罪と、潔白とは常に併行して進みます。安全に生きられるかも知れない人生の半にして、自分の目を閉づる事は、恰度穴と、崖ばかりの土地でも、もつと安全に歩かれるかも知れない、その眼を、自分自身で盲目にするやうなものです。

ウキンダーミャ。（妾と一所に歩いて）お前、何故そんな事を言ふのだい？

ウキンダーミャ夫人。（ソファに座る）何故つて、妾は人生に面して目を閉ぢて崖端に來たのです。それから妾達の仲を割いた人は——

ウキンダーミャ。吾々の仲は決して割かれてない。

ウキンダーミャ夫人。妾達は、二度と決してしますまい。おゝ貴方、たんと妾を愛して下さいまし、妾は、貴方を以前よりももつと信じます。絶對に信じます。セルビイに參りませう。セルビイにある薇薔の園の薔薇は、白くまた紅いのです。

（アウガスタス登場）

アウガスタス。アーサー、彼の女は、すべての事を打ち明かしたよ！

（ウキンダーミャ夫人は非常に驚いた目で瞶め、ウキンダーミ

ヤは立ち上り、アウガスタスはウキンダーミヤの手をとつて舞臺の前に出で、低い聲で早口に話す、ウキンダーミヤ夫人は立つて怕れながら二人を凝視する)。

おい、彼の女はすべてのくだらない事を打ち明けたよ。吾々は皆な全く彼の女を間違ひてゐた。ターリントン家の室に彼の女が行つたのは全く私の爲めであつたのだ。まづ最初にクラブを訪ねた——のは事實だ、私に其處に止つてゐて呉れと要求した——そして私は要求通りに實行した——命令に從つて——私等の仲間が入つて來たのを彼の女が聞いた時は實際に驚いたのだ——そして別の室に退つたのだ——それが何よりも私に滿足だつたのだ、吾々は彼の女を動物扱にした。彼の女は私に尤も適當な女だ。尤も適當な婦人だ。

彼の女の要求した條件は吾々はロンドンを離れて住めといふ事だ。それがまた極めて善い事だ。くだらない倶樂部、くだらない氣候、くだらない料理すべてのものがくだらない。皆な悉く、その病氣に罹つてゐるのだ。

ウキンダーミヤ夫人。(驚いて)イレーネさんが——?

アウガスタス。(夫人の方へ行き、低い聲で)そうです、奥さん——イレーネ夫人は、僕に結婚を承知して呉れた。

ウキンダーミヤ。まあ、貴方は、實際悧巧な婦人と結婚するのです!

ウキンダーミヤ夫人。(夫の手を把り乍ら)まあ、貴方は、極めて善良な婦人と結婚しますよ。

——幕——

終

大正三年三月廿五日印刷
大正三年三月廿八日發行

定價金六拾錢

譯者　鵜沼直
發行者　東京府大久保町西大久保二五八　中西貞
印刷者　東京市麹町區飯田町五ノ六　中山千二郎
印刷所　東京市麹町區飯田町五ノ六　大正社印刷所

不許複製

發行所　東京府大久保町西大久保二五八　不老閣書房　振替東京二七〇二二
發賣所　東京市神田區南神保町一六　尚文堂書店　振替東京一九三四四

338
282

終